

キャリア探索を促す大学キャリア教育に関する研究

— 自己制御の視点から進路選択自己効力感の機能に着目して —

藤 澤 広 美

本研究の目的は、大学キャリア教育において学生の主体的なキャリア探索を促すために、どのような教育的働きかけが有効かを明らかにすることである。この目的を達成するために関連する先行研究の整理や理論的な検討を行い、目標追求時における学生のキャリア探索に関する仮説枠組みを設定し、定量的な検証を行った。

序章では、本研究の背景および問題を整理したうえで目的を述べた。第1章では、先行研究を整理したうえで、従来の大学生のキャリア探索促進に関する研究には、2つの限界があることを指摘した。1つ目は、従来の検討が、個人間の変動に着目したうえで、自己効力感とキャリア探索との関係を明らかにしており、個人内の自己効力感の変動の効果を明らかにしていなかった点である。2つ目は、自己制御の視点から、目標追求時のキャリア探索プロセスについて論じてこなかった点である。第2章では、それまでの議論を整理したうえで、本研究の枠組みを提示した。第3章では、キャリアに関する授業を受けた学生を対象とする調査の結果、自己制御の必要性の程度が高いキャリア探索行動であるほど、その影響力は小さくなる可能性が明らかとなった。この結果から、自己制御の必要性の程度が高いキャリア探索行動では、進路選択自己効力感が高まったとしても必ずしもキャリア探索が促されないメカニズムの存在が示唆された。第4章では、キャリアに関する授業を受けた初年次学生を対象とする調査の結果、学生の進路選択自己効力感が低下した場合に、上昇した場合と比べて、学習への動機づけとインターンシップ参加意欲との正の関係が増大することがわかった。この結果から、目標追求時において進路選択自己効力感の低下した学生ほど、自身のキャリア探索プロセスや目標を再認識し、より積極的に自己制御資源を投入しようとする可能性が示唆された。第5章では、本研究で行った2つの分析結果（研究課題1および研究課題2）を統合し、それらがどのような意味をもつのかについて考察を行った。初年次キャリア教育において学生のインターンシップへの参加意欲を上昇させるためには、教員による学習への動機づけの上昇および進路選択自己効力感を低下させる働きかけが有効であることが示された。言い換えると、目標追求時の自己制御の必要性の程度が高いキャリア探索は、学習への動機づけの上昇と進路選択自己効力感の低下による相互作用によって促進されることが明らかとなった。終章には、本研究の結論を示した。それは、目標追求というキャリア探索の準備段階である初

年次学生には、学習への動機づけを高めつつ、キャリア教育受講における進路選択自己効力感の低下としてあらわされる「自己制御の必要性」を自覚させるような取り組みが、主体的なキャリア探索の促進に有用であるということである。

本研究では、大学生を対象としたキャリア探索領域の研究に対して、以下3つの研究の進展をもたらし、貢献したといえる。1つ目は、目標追求時のキャリア探索を促す進路選択自己効力感の在り方について新たな知見を明らかにした点である。2つ目は、進路選択自己効力感が将来のキャリア探索に与える条件に対する理解がより堅牢になった点である。3つ目は、本研究を展開させる概念的なプロセスへのアプローチのひとつとして「自我の枯渇 (ego depletion)」という視点の有効性が示唆された点である。

しかしながら、本研究には以下の5つの限界があると考えられる。1つ目は、キャリア探索の自己制御の必要性の程度について直接検証できなかった点である。2つ目は、キャリア探索をインターンシップ参加意欲として検証を行った点と学生の学習能力（成績等）の影響を統制できなかった点である。3つ目は、本研究の結論は一般化されたものとは言い難い点である。4つ目は、キャリア探索の持続可能性について実証的な検証ができなかった点である。5つ目は、本研究の調査時期と本稿の執筆時点でキャリア探索環境が異なる可能性があり、今後の応用には注意が必要となる点である。今後はこれらの課題を踏まえ、検証を重ねる必要があると言えよう。